

審査員奨励賞

丸森中学校 3年 平塚 大志

表題「木に学べ」に学んだこと」

書籍名「木に学べ」

皆さんは、宮大工という職業をご存知でしょうか。今回私が読んだのは、宮大工の西岡常一の「木に学べ」という本です。この本には、西岡常一が棟梁として法隆寺や薬師寺を修理した時のことや木、道具、そして、宮大工について描かれています。この本からは、建築の知識だけでなく、人や自然との関わり方を考えるきっかけを得ることができます。

「木を組むには人を組め。」私が、この本を読んで心に残っている一節です。宮大工は、柱や梁、つまり木を組んで建築します。しかし、それは一人では決してできません。何人もの大工が協力して組み上げていきます。西岡常一は棟梁として木ではなく、共に働く職人たちの心を組んで来たのです。私は、この本を読んでからこの

言葉について何度も考えました。何をするのにしても、誰かと仕事をする時は、人を人の心を組むことが大切なのではないかと。

西岡常一は「木を切るには土を知れ。」とも述べています。宮大工はヒノキを使い、寺を建てます。しかし、そのヒノキの質や癖を見るためにヒノキの育った環境を見るということです。厳しい環境で生き抜いたヒノキは、強く良い柱になります。西岡常一は、土をその周りの環境を見るために自らヒノキを切りに行くのです。

私は、「木に学べ」から宮大工という職業を学びました。そして、宮大工になりたいという気持ちがいよいよ強くなりました。なぜなら、宮大工は寺や堂塔を建てるだけではなく、人や自然に触れながら仕事ができるからです。西岡常一は、木を一本伐るにも自然に、山に、感謝することを忘れてはならないと言っています。人を組み、木を組む。そして、自然に全ての物事に感謝できる。そのような宮大工になりたいと、私は今思っています。